公益財団法人日本バスケットボール協会

2025 年度 7-6 月期事業報告

事業の概況

2025 年度は、バスケットボールの価値最大化およびプレゼンス向上を実現するため、FIBA 女子ワールドカップ 2030 の招致を成功させるとともに、LA（ロサンゼルス）2028 オリンピックへの全カテゴリー出場を目標に、「世界で継続的に戦える日本代表」を目指して競技力向上のための環境整備に尽力した。そのような中で、女子日本代表は女子ワールドカップ予選トーナメントを勝ち抜き、2026 年 9 月に開催される FIBA 女子ワールドカップ 2026 の出場権を獲得することができた。

他方、事務局による不適切な経費申請および金銭管理に関する事案が発覚し、事業方針（骨子）に掲げた「JAPAN BASKETBALL STANDARD（JBS）」の将来像実現のための重点実施事項のうち、「ガバナンスの順守と強化」に関しての課題が残る結果となった。今後「JBA 創立 100 周年」以降を見据え、活力あふれるサステナブルな体制を構築し、健全で発展的な競技環境を整えていくためにも、これらの課題に真摯に向き合いながら、再発防止策の立案・実行に継続的に取り組んでいく必要がある。

財政基盤においては、当初の計画では約 3.9 億円の赤字予算を組んでいたが、決算としては 9 千万円の黒字で終えることができた。これは、各部署における予算管理の意識と行動が功を奏し、経費削減を推進できたことが大きな要因であったと言える。

【参考】2025 年度 7-6 月期の重点実施事項（「2025 年度 7-6 月期事業方針」より）

① JBS2021 の中間レビュー～JBS2025 の周知、JBA 中期計画の作成と実現に向けた体制の構築
② 組織の成長に繋げ、持続可能な JBA・PBA（都道府県バスケットボール協会）・関連団体の在り方を先取りした体制構築と運用
③ ガバナンスの順守と強化
④ DX、ITC、AI 等の最新技術の活用
⑤ LA（ロサンゼルス）2028 オリンピックや 2027 ワールドカップ、2026 女子ワールドカップに向けた強化と育成
⑥ 2030 女子ワールドカップ、2028 女子 OQT（オリンピック世界最終予選）、3x3 国際大会の招致
⑦ マーケティングに連動した大会設計と商品開発
⑧ B リーグ、WJBL、大学、高校、車いすバスケ等の現場連携
⑨ 代表活動、育成に留まらず、広く JBA の活動や理念、計画、成果を発信
⑩ 「生涯バスケ部 PJT」と「ジュニアバスケ DX アクション」の推進
⑪ DX を活用した登録制度、PBA 連携、PBA 支援の推進
⑫ デジタル技術や SNS を活用したプロモーション展開～バスケ活動の効率的な周知
⑬ SDGs、社会課題の解決につながるバスケファミリー連携の強化（車いすバスケ含む）

活動報告（概況）

【1】日本代表関連

1. 男子日本代表活動概況

2025 年10 月より、これまでの「技術委員会」から「日本バスケットボール強化委員会」に組織名を改称し、伊藤拓摩氏を委員長に迎え、新たな強化方針や各カテゴリーの役割分担などを定めた。

男子日本代表については、新体制になってもこれまでと同様、「LA2028 オリンピックに出場して勝利すること」を目標として、オリンピックに向けた強化を進める中で、ヘッドコーチやコーチングスタッフの交代がありながらも、FIBAワールドカップ 2027 の出場権獲得を目指し、アジア地区予選の Window1（チャイニーズ・タイペイに 2 連勝）および Window2（中国に敗戦、韓国に勝利）を戦った。引き続き、Window3・4 の勝利に向けて強化を進めていく。

アンダーカテゴリー男子日本代表は、U16 代表が U16 アジアカップ 2025（2025 年 8～9 月）でベスト 4 に入り、U17 ワールドカップ 2026 の出場権を獲得。当該の U17 ワールドカップ 2026（2026 年 6～7 月）では、最終的に 1 勝 6 敗で 14 位の成績に終わった。また、U18 代表が福岡で開催された U18 アジアカップ 2026 東アジア地区予選（2026 年 6 月）で 3 位となり、U18 アジアカップ 2026 の出場権を獲得。2026 年 8 月に開催される同大会でベスト 4 に入り、U19 ワールドカップ 2027 への出場権を獲得できるよう、引き続き強化活動を継続する。

その他、最優先目標としては LA2028 オリンピック出場を掲げつつ、LA 後のブリスベン大会、更に次のオリンピックへの出場を実現するため、次世代の選手強化を目的とした NEXT 代表チーム（仮称）を立ち上げる構想を推進している。

2. 女子日本代表活動概況

女子日本代表は、伊藤拓摩氏の強化委員長就任に伴い、萩原美樹子氏を女子代表強化部会の部会長として、新たな体制で強化に向けた動きを開始した。

女子アジアカップ 2025（2025 年 7 月）では準決勝で宿敵中国を破って 2 位の成績を収め、女子ワールドカップ 2026 予選トーナメントでは連敗スタートとなったが格上カナダに勝利し、最終戦のアルゼンチン戦では大勝、女子ワールドカップ 2026 の出場権を獲得することができた。2026 年9月に開催される同大会で勝ち進めるよう、引き続き強化活動を推進する。

アンダーカテゴリー女子日本代表は、U16 代表が U16 女子アジアカップ 2025（2025 年9月）で 3 位に入り、U17 女子ワールドカップ 2026 の出場権を獲得。U19 代表は、U19 女子ワールドカップ 2025（2025 年7月）で 6 位の成績を収めた。今後も各カテゴリーのアジアカップにおいてはワールドカップの出場権獲得を必達目標とし、更にワールドカップでメダルを獲得できるよう、強化活動を継続していく。

その他、女子も男子と同様、次世代の強化を目的とし、NEXT 代表チーム（仮称）を立ち上げる構想を推進している。

3. 3x3 男子日本代表活動概況

3x3 男子日本代表は、2026 年 1 月に専任コーチとして着任した中祖 HC の下、FIBA3x3 アジアカップ 2026、FIBA3x3 ワールドカップ 2026 での上位進出を目標に活動に取り組んだ。アジアカップでは、年間を通して 3x3 を主戦場とする選手でチームを編成し予選プールを勝ち上がったが、準決勝では今大会初優勝したニュージーランド、3 位決定戦では中国に敗れて前回大会同様の 4 位となった。続くワールドカップにもアジアカップと同じメンバーで臨んだが、予選プール 4 戦全敗となり、決勝トーナメントには進出できず最終順位は 20 位となった。また新たな試みとして、日本代表とは別活動で B リーグ所属選手を主体とした「Team TOKYO」を編成し、FIBA3x3 CHALLENGER に 3 大会出場した。3x3 経験の差で勝ち星は挙げられなかったものの、局面では対戦相手を上回る活躍を見せるなど、ロサンゼルスオリンピック出場という目標に対し、具体的な強化方針を明確化することができた。アンダーカテゴリー日本代表は、U23 男子日本代表が FIBA3x3 U21 ネーションズリーグ 2025 アジアで総合 4 位となり、U23 ワールドカップ出場権の獲得とはならな

かった。また、例年 6 月に開催されているネーションズリーグが 7 月開催となったため、今年度は 1 回のみのネーションズリーグの開催となった。

2026 年度はネーションズリーグ、U23 ワールドカップに加えアジア競技大会を控えているため、さらに各カテゴリーの強化を推進していく。

4. 3x3 女子日本代表活動概況

3x3 女子日本代表は、前年度に続き前田 HC 体制の下、ウィメンズシリーズ、アジアカップ、ワールドカップに向けて、強化活動に取り組んだ。ウィメンズシリーズでは、2025 シーズンのジャカルタストップで予備予選からのスタートで優勝、2026 シーズンも 4 ストップに出場し、うち 2 大会でベスト 4 に入る活躍を見せた。アジアカップでは準決勝でフィリピン、3 位決定戦で中国に敗れ 4 位、ワールドカップでは初戦のフランス戦には勝利したものの、以降は僅差での敗戦となり 15 位で大会を終えるなど、絞り込まれた選手での継続的な強化活動を推進した。 アンダーカテゴリー日本代表は、FIBA3x3 U21 ネーションズリーグ 2025 アジアで 6 ストップ中 4 ストップで優勝し、ツアー総合優勝を果たして U23 ワールドカップの出場権を獲得した。U23 ワールドカップでは予選プール 4 試合を僅差で全勝し、準々決勝でもポーランドに勝利。準決勝では優勝したオランダに、3 位決定戦でスペインに敗れて 4 位となったものの、過去 3 番目の好成績を残すことができた。

2026 年度は 7 月・8 月のネーションズリーグ、アジア競技大会にむけて継続した強化活動に取り組んでいく。

【2】国際

1. 国際会議派遣／国際人材輩出概況

2025 年 5 月にバーレーン・マナマにて開催された FIBA 中期総会を経て、2025 年度は FIBA サイクルの後半期に入った。現在 JBA はセントラルボードおよび各種委員会で計 3 枠（国際理事・委員枠）を維持しているが、2027 年に控える FIBA 改選期に向けて、これらの議席および国際的な発言力を維持・拡大するための戦略的アプローチを本格化させた。また、組織としての更なる海外ネットワーク拡大と国際対応力の強化を目的に、様々な部署からの海外派遣機会を拡充。政治的・事務的な両面から国際バスケットボール界における日本のプレゼンスを高め、世界的に活動を展開するための組織基盤の構築を強力に推進した。

2. その他国際関連活動概況

2024 年のパリオリンピックを終え、LA2028 オリンピックや FIBA ワールドカップ 2027 に向けた新たな強化サイクルが始動。

2025 年 6 月には、B リーグ王者として BCL Asia を制した宇都宮ブレックスが、日本のクラブとして初めてアジア代表として「FIBA インターコンチネンタルカップ 2025」（2025 年 9 月開催）に出場を果たすなど、クラブレベルでの国際貢献・交流も大きく進んだ。 また、10 年にわたり日本バスケットボール界の発展および再生に大きく寄与してきた「FIBA タスクフォース 2024」は、2025 年 1 月の会議をもって無事に解散となり、現在は FIBA との直接的な意見交換を通じて新たな支援・連携体制の運用へと移行している。

競技面・大会運営面においては、アンダーカテゴリー（U18/U16）のアジアカップ本戦出場に向けた「東アジア地区予選」の開催が必須化された。これを受け、2026 年 6 月には初開催となる「FIBA U18 アジアカップ 2026 東アジア地区予選」を福岡県にて主催・運営し、今後の予選運用における重要な足がかりを築いた。

その他、包括的パートナーシップを締結しているドイツおよびオーストラリアバスケットボール連盟との定期的な情報交換や連携に加え、その他のアジアの国々とも若手育成や交流試合を目的とした包括連携協定（MOU）締結に向けた協議を進めるなど、交流国・地域を拡大。更に、代表強化・育成に向けた各種海外遠征（男女日本代表・アンダーカテゴリー代表）の調整・実施を精力的に展開した。

【3】 育成

1. 選手育成事業概況

2025年度の選手育成事業では、U12ブロック育成センター・U15ブロック育成センターを通し、指導重点項目である「質の高いペイントエリア内の攻防」についての周知に努めた。また９ブロックで U14ブロック交流活動を実施し、指導者の情報交換や選手のチャレンジ環境を創出した。U14/U15 ナショナル育成センター・ジュニアユースアカデミーでは、トライアウト 1 回とキャンプ 2 回を実施し、選手発掘およびアンダーカテゴリー代表へのパスウェイを構築した。2026 年６月にはユース育成担当者会議を実施し、2026-27 年度のユース育成事業について伝達を行ったほか、育成センター事業の実態について内容を共有した。また、各カテゴリーコーチを対象に WEB 講習会を実施し、「長期的に選手育成する視点」や「移行期の選手へのアプローチ」等について学びの場を提供した。

その他、ユース育成部会では、育成キャンプやブロック事業における今後の事業設計に関して継続的に意見交換を行い、より効果的な育成事業の実現へ向けて外部協力者とともに育成環境整備に努めた。

2. マンツーマン推進事業概況

2025 年 8 月の全中（全国中学校大会）ブロック大会、全中大会にてマンツーマンに関する講習会を実施し、都道府県・ブロック・全国大会での基準規則の共通認識を図った。また、年間を通してマンツーマンコミッショナーの派遣を行い、2025 年 8 月の全中大会、2026 年 1 月の全国 U15 選手権大会、3 月の全国ミニ大会の事業運営を行った。

その他、2025 年 12 月、2026 年 4～6 月にマンツーマンディレクター会議をオンライン開催し、今後のマンツーマン推進活動について検討を進めた。

【4】 指導者

1. 指導者養成事業概況

2025 年度の指導者養成事業では、各種ライセンスに関する講習会や指導者の資質向上のための研修会などを企画・実施するとともに、コンテンツ作成にも取り組んだ。

また、都道府県指導者養成委員会とも連携し、各都道府県での D 級、C 級、キッズサポーター養成講習会、リフレッシュ研修などの開催を推進した。

（1） 講習会事業

講習会事業においては、年間を通して概ね例年同様に各種ライセンスの講習会を実施した。主なトピックスは以下の通り。

・コーチデベロッパー講習会について、近年の受講状況を鑑み、年間 2 回から 2025 年度以降は年間 1 回とする方針を決定

・キッズサポートリーダー講習会について、近年の受講状況を鑑み、年間 3 回から 2025 年度以降は年間 2 回とする方針を決定

・C 級コーチの女性コースを初実施

・トップリーグ向けの講習会については 2024 年度から D 級と C 級の隔年開催に変更

（2） 研修会事業

研修会事業においては、例年同様の事業を展開しつつ、発展的内容や新たな試みにも取り組んだ。主なトピックスは以下の通り。

・女子中高生のための「ずっとバスケ」応援イベント（女性コーチ、レフェリー、TO、事務局など、バスケットボールへの関わり方について紹介・体験してもらう、普及を目的としたイベント）を開催

・2025 年度より C 級・D 級コーチ養成講習会の質の向上、平準化を企図し、コーチデベロッパー情報伝達会を実施

・コーチライセンスの更新制度の変更により新たに導入することになったライセンス別研修について、2024 年 12 月より e ラ

ーニングコンテンツとして展開

・ナイキジャパンと共催で、女子選手の早期リタイアの課題解決に向け、女子選手の指導者を対象とした「COACH THE DREAM～女の子のためのスポーツの未来の描き方～」を開催

【5】 審判

1. 審判事業概況

2023 年度より、「中長期で作りたい未来」として、「1.各種大会を運営するのに十分な審判員」、「2.登録審判員全体のレベルアップ」、「3.誇りとやりがいのある審判活動」を掲げ、これらを実現するための各種施策を実行。2025 年度の施策は以下の通り。

（1）施策①インストラクター改革

トップリーグにおける審判員の評価基準統一を目的に、シーズン前から終了までT級審判インストラクターを対象に計4回のウェビナーを開催。現状を踏まえ、インストラクターライセンス取得者の活躍の場を拡大し、審判員を強化するための施策としてインストラクターの現場派遣による指導を実施した。

（2）施策②割り当ての偏り改善

特定の審判員の稼働が多くなっていた背景から、全国大会に招集するＳ級審判員について、JBA と大会担当者間の調整で稼動過多を改善し、より多くの審判員が活躍できるよう努めた。また天皇杯・皇后杯 1 次ラウンドや U18 日清食品リーグの派遣対象について、Ｓ級以外を推奨することで A・B 級審判員および U18 審判員の活躍を推進した。

（3）施策③トップレフェリーの強化

プロフェッショナルレフェリー、FIBA レフェリー、トップリーグ担当審判員を対象とした強化事業を計 6 回実施。女性Ｓ級審判員を対象とした情報共有会を計 3 回実施。事前に映像クリップなどを配布し、それについて全体またはスモールグループでのディスカッションを実施した。

（4）施策④審判技術情報の共有推進

B・C・D・E 級を対象に定期的な審判情報コンテンツのオンライン発信を計画。ウェビナーを計 3 回実施して審判技術の共有を行い、情報や技術の標準化を図った。

（5）施策⑤女性審判員の普及・拡大

審判委員会女性分科会のメンバーを中心に、各都道府県で女性審判員を３名ずつ増やすことを目的に女性向け審判講習会を実施。結果として 2024 年度の女性登録審判員 12,245 名から 2025 年度は 13,768 名となり、1,523 名増加した。

その他、大会の増加に伴い、審判/審判インストラクターライセンスの登録者も増加。審判ライセンス登録者は 66,200 名（前年度比 111%）、審判インストラクターライセンス登録者は 3,875 名（前年度比 103%）に上った。

【6】 競技・運営

1. 国内競技会概況

（1）天皇杯・皇后杯

「第101回天皇杯・第 92 回皇后杯」は、例年の分散開催から年始の集中開催に移行する大改編を実施した大会となった。短期間での開催となり、各所に様々な変化が生じたが、大きなトラブルもなく大会を開催することができた。

天皇杯決勝はアルバルク東京対シーホース三河の古豪対決となり、結果はアルバルク東京が 72-64 で勝利を収め、14 大会ぶり 3 度目の栄冠に輝いた。皇后杯決勝はデンソーアイリス対 ENEOS サンフラワーズの対決となり、過去 8 度同一カードとなった。結果は 76-62 で ENEOS サンフラワーズが試合を制し、3 大会ぶりの王座奪還を果たした。

（2）U18 日清食品リーグ

U18 世代のトップチームが参戦できる「U18 日清食品トップリーグ 2025」は、「U18 世代 3 冠」の権威が浸透。各地のアリーナでトップカードを開催することで競技普及を推進し、U18世代とともに大会を創り上げた。「U18日清食品ブロックリーグ 2025」では、地域毎のブロック開催からグループ A～H の全国全８グループで地域の垣根を越えたリーグ戦に改編。男子では 4 チームの B.LEAGUE クラブ U18 チームが参加した。特に 2025 年度は、「U18 日清食品トップリーグ入替戦」および「U18 日清食品ブロックリーグ参入戦」を初開催し、「U18日清食品リーグ中期方針2025」に沿って、トップリーグ・ブロックリーグ・ブロックリーグへの都道府県代表を、部活・クラブの垣根を越えて繋がる階層構造への環境整備を推進した。更に「U18 都道府県リーグ」では、2025 年度に全 47 都道府県での開催を実現。今後もリーグ戦文化を推進し、U18世代の育成・強化・普及により貢献する大会としての発展を目指す。

（3）ウインターカップ

「SoftBankウインターカップ2025」では、大会認知度向上に向けた話題化と露出機会創出施策を実施。組み合わせ抽選会のニアライブ配信の実施や開会式での選手宣誓を立候補制に変更するなど、従来からの実施施策を発展させて話題性を高め、認知度向上に努めた。結果として、大会7日間での合計入場者数は大会史上最多の 67,694 名を記録した。男子は福岡大学附属大濠高等学校が 2 大会連続 5 回目の優勝、女子は大阪薫英女学院高等学校が初優勝を果たした。

（4）Jr.ウインターカップ（全国 U15 選手権大会）

「京王 Jr.ウインターカップ 2025-26」は、大会改編後 6 回目の大会となった。男子決勝では立川ダイス U15 との接戦を制した京都精華学園中学校が初優勝、女子決勝では四日市メリノール中学校を大差で退けた京都精華学園中学校が 3 連覇を成し遂げ、男女ダブル優勝を果たした。また、大会 5 日間での総来場者数は、過去最多の 35,027 名を記録した。

なお次年度大会は、一定の役割を果たした「JBA 推薦枠」を廃止し、都道府県代表 47 枠に開催地 1 枠を加えた合計 48 チーム×男女＝96 チームで開催する。

（5）全国ミニ大会

「第57回マクドナルド全国ミニバスケットボール大会」は、引き続き全国の U12（小学生）世代に対する競技の普及・選手育成、更には全国の仲間との交流・交歓を主な目的として、順位や優勝を争わない交歓大会の位置付けで開催した。競技力の高い小学生年代を対象とした特別ルール、「ゴールの高さ 305cm、6 号ボール、スリーポイントライン」を全国大会で導入し、コートサイズも正規の規格で実施。前年度大会と比較して、3P シュート・2P シュートともに決定率は下がったものの、試投率は増加しているため、戦術として取り入れられていることが確認できた。また、コートサイズが広くなったことで、オフェンス面でのスペーシングやディフェンス面での正しいポジショニング等を体感できる機会となった。

2. 国際競技会（国内開催）概況

2025 年7月、女子デンマーク代表を招いて女子日本代表国際試合（三井不動産カップ 2025 東京大会）を、男子オランダ代表を招いて男子日本代表国際試合（日本生命カップ 2025 東京大会）を、有明アリーナにて４日間連続で開催した。女子代表は 1 勝 1 分、男子代表は 1 勝 1 敗の戦績で、酷暑にもかかわらず、いずれの試合も多くのお客様にご来場頂くことができ、会場は大いに盛り上がった。

同月、LaLa アリーナで男子デンマーク代表を招き、男子日本代表国際試合（SoftBank CUP 2025 千葉大会）を開催。結果は日本代表が 2 連勝し、JBA としては初開催のアリーナではあったが、無事に大会を終えることができた。

2025年11月には「FIBAワールドカップ2027アジア地区予選」のWindow1（日本対チャイニーズ・タイペイ）をGLION ARENA KOBE にて開催。2026 年 2 月には Window2（日本対中国、日本対韓国）を沖縄サントリーアリーナにて開催した。日本代表は会場の大声援を背に2勝1敗の成績を収め（アウェイの戦績を含めると４勝２敗）、無事 1 次予選を突破。ホームとして日本代表を後押しした結果となった。

その他、2026年5月には女子ラトビア代表を招いて女子日本代表国際試合（三井不動産カップ2026神奈川大会）を横浜BUNTAIにて開催。結果は日本代表が2連勝し、運営面ではアリーナの特長であるコートサイド側の大型ビジョンを活用して演出面の充実を図り、来場者の満足度向上に努めた。

3. 3x3 国内大会概況

2025年度は、全国47都道府県代表の頂点を決める「3x3 日本選手権」「3x3 U18 日本選手権」、新たにU23カテゴリーが設置された「JAPAN TOUR」を開催、2026年度8月のFIBA3x3 ウィメンズシリーズ東京ストップ2026に向けた開催準備に取り組んだ。

3x3 日本選手権は、会場を横浜BUNTAIに移して初めての開催となった。男子は僅差の試合を制したSHINAGAWA CITY、女子はFLOWLISH GUNMAがそれぞれ初優勝となった。SHINAGAWA CITYにはFIBA 3x3 ワールドツアー、FLOWLISH GUNMAにはFIBA 3x3 ウィメンズシリーズの出場権が与えられた。

3x3 U18 日本選手権は、前年度に続き大森ベルポートで開催し、入場料を設定するなど新しい試みにもトライした大会となった。男子はデンジャラス（新潟・開志国際高校）が2大会ぶり2度目、女子はKUN-EI（大阪・大阪薫英女学院高校）が初優勝を飾るなど、3x3を主戦場とする選手に加え、5人制の全国大会上位入賞チームからも多数参加し、競技レベルの向上が見られた。

JAPAN TOURは、トップカテゴリーを「U23」に変更してJR博多駅前広場や上野公園、三井不動産所有の商業施設などハイトラフィックな場所で積極的に開催した。FUz HOKKAIDO.EXEが初代ツアーチャンピオンに輝き、「FIBA 3x3 チャレンジャー」の出場権を獲得した。また、OPEN/CHALLENGE カテゴリーでは、都道府県協会やパートナー企業の大会開催をサポートするなど、全国でのOPEN/CHALLENGE開催で普及に努めた。

女子日本代表のポイント戦略および競技普及の一環として、JBA 初の主管となる「FIBA3x3 ウィメンズシリーズ」（東京・代々木第二体育館）の開催に向けて準備を行った。

その他、普及的位置付けとして、自治体や外郭団体とのコラボレーションイベントにも積極的に取り組み、3x3 の普及および認知度向上に努めた。

【7】 普及・啓発活動

1. 普及事業概況

学校体育への取り組みとしては、授業研究会をオンラインにて収録し、動画コンテンツを広く一般に公開。研究会では、「小学校低学年代に対するバスケットボールを通じた指導ポイント」をメインテーマに、実践と理論の両面から授業展開に役立つ発表がなされた。

競技者数増加に向けた施策としては、未就学児・ファミリー向けの体験イベント「バスケットボールチャレンジデー」を全国10会場において実施。「生涯バスケ部」プロジェクトにおいては、部員・指導者不足などで競技環境に恵まれないチームの支援を行った。

また、PBA ウェブサイトの UI・UX 改善を目的として、25PBA の共通 CMS（コンテンツ管理システム）への移行を完了。JBA としても、現有の公式ホームページ・大会特設サイトの課題改善、バスケライフを豊かに過ごせる情報が得られる場所の創出等を目的としてサイトリニューアルを実施。これを機に、デジタルを活用した「バスケで日本を元気に！」の理念とバスケットボール界の価値最大化を目的としたデジタルコミュニケーション戦略の構築にも着手した。

その他、日本代表チーム「AKATSUKI JAPAN」を後押しするオフィシャルチアリーダーズ「AKATSUKI VENUS®」の活動を通じ、バスケットボールの振興に努めた。

2. 各種啓発活動概況

アンチ・ドーピング活動として、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）と連携し、主な国内競技会（B リーグ・W リーグ・天

皇杯皇后杯）および国内で開催される国際大会におけるドーピング・コントロールを実施。男女各カテゴリーにおける日本代表強化合宿ではアンチ・ドーピング教育の時間を設け、強化選手・スタッフ向けの啓発活動を行った。

また、バスケットボール活動現場における暴力・暴言・ハラスメント行為等の根絶に向けた啓発活動として、PBA 主催の予防・啓発の取り組みをサポートした。具体的には、主に指導者や審判員、保護者等の各 PBA に所属するバスケットボールファミリー対象の研修会・講習会への講師斡旋や資料の提供等を行った。今後も引き続き「バスケットボールファミリー安心安全保護宣言」に基づいた、より良いバスケットボール環境の構築を目指し、インテグリティ委員会を中心に関係各所と連携・協力して事業を展開していく。

その他、SDGs（持続可能な開発目標）および JBS に掲げる「自然環境を意識した取り組みの実践」の一環として、"スポーツ界から使い捨てプラスチックをなくそう"の理念を掲げる公益財団法人日本財団 HEROs プロジェクト内「HEROs PLEDGE」にパートナー団体として参画。環境に配慮した商品を AKATSUKI JAPAN オフィシャルグッズとして開発・販売し、リユースの意識醸成を図るなどした。

【8】 認定および登録管理

1. コーチライセンス概況（2025 年度：2025 年 4 月～2026 年 3 月）

2025 年度の S～E 級のコーチライセンス取得者（登録数）は 72,438 人と、2024 年度の 67,293 人から前年度比+5,145 人／107.6%の増加となった。また D 級以上の登録数は、各都道府県での D 級/C 級コーチ養成講習会の開催により、前年度比+1,549 人／105.5%（S（F）級、A（F）級、B（F）級コーチを除く）に増加した。

その他のライセンスでは、コーチデベロッパーは前年度比＋52 人の 346 人となり、300 人台を突破した。

【コーチ登録数】（単位：人）

S 級※	A 級※	B 級※	C 級	D 級	E 級	合計
193	472	1,526	12,341	14,876	43,030	72,438

※ S（F）級、A（F）級、B（F）級コーチを含む

コーチデベロッパー	ジュニアエキスパート	キッズサポーター	キッズサポートリーダー	キッズサポートマスター
346	79	3,337	163	5

2. 審判ライセンス概況（2025 年度：2025 年 4 月～2026 年 3 月）

審判ライセンス取得者（登録数）は前年度比 6,568 人増（111%）の 66,200 人、審判インストラクターライセンス取得者（登録数）は前年度比 115 人増（103%）の 3,875 人となった。

【審判登録数】（単位：人）

S 級	A 級	B 級	C 級	D 級	E 級	合計
183	367	4,928	10,048	14,271	36,403	66,200

【審判インストラクター登録数】（単位：人）

T 級	1 級	2 級	3 級	合計
29	192	386	3,268	3,875

3. チーム、競技者（3x3 を含む）の登録概況（2025 年度：2025 年 4 月～2026 年 3 月）

全般的には前年度を上回る登録実績だったものの、コロナ禍前の登録数までにはまだ回復できていない状況が続いている。カテゴリー別の特徴として、U15 カテゴリーについては前年度同様にチーム加盟数・競技者登録数ともに中学校は減少し、クラブは増加した。U18 カテゴリーについてはチーム加盟数が微減、競技者登録数は増加となり、全日制高校は▲74 チームと、高校の統廃合の影響が考えられる。登録 2 年度目となった一般（Ⅱ種）に関しては、チーム加盟数・競技者登録数と

もに増加となった。また一般（Ⅰ種）についてもチーム数・競技者数ともに増加となり、一般カテゴリー全体でも増加となった。

【チーム加盟数】

	2025 年度	2024 年度	前年度比	
U12	8,346	8,341	100.1%	+5
U15	13,587	13,394	101.4%	+193
U18	7,424	7,496	99.0%	▲72
一般（Ⅰ種）	3,228	3,162	102.1%	+66
一般（Ⅱ種）	801	618	129.6%	+183
計	33,386	33,011	101.1%	+375

【競技者登録数】（単位：人）

	2025 年度	2024 年度	前年度比	
U12	164,508	166,334	98.9%	▲1,826
U15	222,361	225,174	98.8%	▲2,813
U18	135,458	131,939	102.7%	+3,519
一般（Ⅰ種）	49,068	47,482	103.3%	+1,586
一般（Ⅱ種）	11,275	9,397	120.0%	+1,878
計	582,670	580,326	100.4%	+2,344

【3x3 登録数】（単位：人）

	2025 年度	2024 年度	前年度比	
3x3	1,691	2,434	69.5%	▲743

4. TO ライセンス概況（2025 年度：2025 年 4 月～2026 年 3 月）

TO の普及育成を目的として、2023 年度よりTO ライセンスの認定を開始し、国内トップリーグ等において活動するTO に対して B 級 TO ライセンスの取得と JBA 登録を必須化。また都道府県等で開催される大会において、主に TO を担当する競技者向けに「TO 基礎講習（e ラーニング）」を開始した。2024 年度からは、B 級 TO の養成に係る TO 実技講習会の講師に対して TO インストラクターライセンスの取得と JBA 登録を必須化し、更に 2025 年度から A 級 TO の認定を開始した。2026 年度以降は審査会実施の仕組みを整備して本格的に普及を進め、TO基礎講習の更なる普及と修了者の登録推進に向けた取り組みを強化していく。

【TO 登録数】（単位：人）

	2025 年度	2024 年度	前年度比	
JBA 公認 TO インストラクター	137	117	117%	+20
JBA 公認 A 級 TO	–	–	–	–
JBA 公認 B 級 TO	1,081	1,021	106%	+60
TO 基礎講習修了者	13,040	7,198	181%	+5,842

5. エージェントの登録（2025 年度：2025 年 4 月～2026 年 3 月）

2023 年 1 月 1 日より施行されたエージェント規則に基づき、2023 年度からエージェント登録を必須化した。2025 年度の新規登録者数は FIBA ライセンス保有者 17 人、FIBA ライセンスを保有しないエージェント 18 人の計 35 人、更新登録者数は FIBA ライセンス保有者 83 人、FIBA ライセンスを保有しないエージェント 30 人の計 113 人となり、総登録者数は 148 人（うち有効登録者数は 142 人）であった。

6. その他（JBA 公認コーチ・審判ライセンス取得者向け登録証の発行終了）

昨今のデジタル化の進展や SDGs の推進、また各種資材や人件費、物流コストの高騰などを鑑み、財源の有効活用および効率化を図るため、前年度まで JBA 公認コーチ・審判・審判インストラクターライセンス保有者へ発行していたカード型の登録証の発行を終了し、PDF 登録証・デジタル登録証のみの運用に移行した。

【9】 組織運営

1. 諸会議の開催・運営概況

2025 年度は、理事会の一部権限を事務総長に移管して「経営と執行の分離」を推進するとともに、各種委員会構成を改編するなどして新たな枠組みによる組織運営、諸会議運営を展開した。

特筆すべき事項としては、これまで時限立法的に設置・運営されていた次期役員候補者の選考機関（会長/役員候補者選考委員会）を、「役員選考・報酬委員会」として常設し、役員評価を含めた活動を通年で行えるように整備したこと、また、島田新会長のマニフェストや JBS2025 に掲げた「2030年のあるべき姿」を実現するため、JBAのホールディングス機能の強化と具体的なアクションプランの策定・遂行を目的として、特別委員会「将来構想委員会」下に「ONE BASKETBALL 推進部会」を設置し、配下のワーキンググループ（JBS 推進 WG、ブランディング・ビジネス向上 WG、中長期構想 WG）において、諸活動を活発に推進したことなどが挙げられる。

2. アンダーカテゴリー部会の運営概況

アンダーカテゴリー部会では、2024 年度に策定した U12/U15/U18 各カテゴリーの中期方針の実行に向けて、執行会議・全国部会長会議・大会実施委員会との合同会議など、各カテゴリー部会の会議体運営の他、PBA 各部会長や関連団体と連携を図り、諸活動の監理と各 PBA の実態把握と諸課題の解決に取り組んだ。

U12 カテゴリー部会では、普及施策をセットで取り組むことを条件に、各 PBA の任意申請制で全国ミニ大会予選における U12 特別競技ルールの導入を推進。また、2026 年 3 月末に全国大会会場にて全国部会長会議を開き、バスケットボールを楽しむ競技環境を整えるため、「インテグリティ活動及び都道府県での今後の取り組みに向けて」というテーマで研修会を行った。その他、9 ブロックでの足育・足守事業（講習会）を開催した。

U15 カテゴリー部会では、2025 年 3 月に策定した「U15 カテゴリー中期方針 2025」の推進初年度を迎え、各 PBA で登録と大会参加に関して整理、周知を図った。また、2025 年 12 月に、スポーツ庁より「部活動改革及び地域クラブ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」が示されたことに伴い、新たな決定事項に対する対応策の検討を行った。

U18 カテゴリー部会では、「U18 日清食品リーグ中期方針」に則り、都道府県からトップまで繋がるリーグ構造の実現に向け、PBA の協力を得ながら取り組んだ。引き続きリーグ戦文化の醸成とともに、U18 カテゴリーの競技環境の見直し等を検討していく。

3. 危機管理対策本部の運営概況

不適切な経費申請および金銭管理に関する事案が発覚したことに端を発し、危機管理対策本部を立ち上げて、事案の全容解明と原因の究明、ファン・理事会、所管官庁・統括団体等への説明責任を果たす観点から、進捗確認会議を適時適切に実施した。JBA は公益財団法人として、高い清廉性、誠実さ、公共性が求められる立場であること、中央競技団体として、傘下団体を指導・牽引すべき立場であることから、率先して自らの業務体制やガバナンスの強化を実現するべく再発防止策を立案し、実行している。

4. コンプライアンス推進事業の概況

裁定委員会・規律委員会では、主に JBA に登録する指導者・審判員による倫理規程違反に関する調査・事実認定を

行い懲罰案を答申しているが、案件の増加とともに内容も多様化・複雑化しており、調査や審議に掛ける時間が増加した。
通報対応においても高止まり傾向ではあるが、被害者や通報者に寄り添った丁寧な対応を心掛けるとともに、裁定委員会・規律委員会や PBA・B リーグ・各種連盟とも連携し、迅速かつ適正な手続きによる懲罰や注意喚起等を行った。
今後も各委員会を中心とした適正な事業運営と手続きの下、バスケットボール界における秩序維持・コンプライアンス向上を図り、具体的な再発防止策や規程整備等のガバナンス強化を、関係団体の協力も仰ぎながら推進していく。

5. D-fund 制度の運用概況

2025 年度は、2024～2026 年度の 3 か年を適用期間と捉えた D-fund 運用の見直しを行ってから 2 年度目にあたり、ファンド A については将来を見据えた普及・登録推進事業や喫緊の課題に充当することを目的に、7 つの対象事業区分（キッズサポーター講習会、キッズ対象活動事業、登録推進事業、暴言暴力等撲滅に向けた対応支援、裁定・規律案件における対応支援、中学校運動部活動地域移行化に向けた支援、HP や SNS 等の開発・運用の支援）を設定。ファンド B については 1PBA あたり一律 500 万円を設定した（北海道協会のみ 1 都道府県＝1 ブロック単位のため、4PBA 扱い）。ファンド A の上限額については、前々年度のチーム加盟数・競技者登録数・1 チームあたりの指導者数・1 チームあたりの審判員数をポイント化して算出し、各 PBA はクラス毎（5 段階）に設定されたファンド A 上限額内で対象事業を申請するものとした。また、ファンド A 上限額の 30%を上限として、ファンド A からファンド B への付け替えを可能とした。
その他 D-fund とは別途、PBA 基盤強化費として、PBA 振興費、全国大会審判派遣補助費の交付を行った。

【10】 事業

1. 出版物等販売事業概況

2025 年度は公式スコアシート、公式スコアブック、オフィシャルズ・マニュアル、ルールブックの販売売上が前年度比で 109%と堅調に推移した。

2. BtoC 事業概況

2025 年度はキャラクターコラボ商品や流行を意識した多様なラインアップ商品を展開したほか、日本代表および主管大会におけるチケッティング・MD の売上最大化、ギブアウェイによる会場の雰囲気作り、エンターテインメントの充実による顧客満足度の向上に努めた。また、「AKATSUKI JAPAN」を始めとする JBA のブランディングを推し進め、ファンクラブ運営においても、チケッティングと連動させるツアー企画等の取り組みにより、会員数伸長を実現した。

【11】 広報・プロモーション

1. 広報活動概況

2025 年度は、ステークホルダー等の皆様の協力を得ながら、広報活動を通じて大会への準備段階を含めた男女日本代表の認知度アップ・価値向上に努めた。限られた人手の中、業務委託・外部スタッフの助けも借りつつ、3x3 を含む各日本代表チームに広報 PR 主担当を配置し、チーム密着型で濃密な広報 PR 活動を展開。これにより内外のメディアコンテンツにおいてそれぞれ露出向上が果たされ、国内バスケットボールファンのみならず、一般スポーツファンの間でも明らかに認知度が向上し、広報 PR 施策は一定程度以上の成果を得たと考えられる。
一方、JBA 内部の施策についても各部署と協働し、レフェリー活動に関するメディアブリーフィングを実施するなどして各現場を後押しした。今後も引き続き各部署との密接な連携を強化し、前向きな姿勢で JBA の内部広報 PR 活動についても推進していきたい。

2. 対メディア活動概況

対メディアに関しては、日本代表メディア公開デーを頻繁に実施するなどしてより関係を深め、各大会期間中においてもメディアとの会話を大切にし、メディアとJBAとの相互理解のある報道に結び付けるべく努力した。更に2025年11月以降、理事会後の島田新会長によるメディアブリーフィングを毎月実施。その結果、概ね理解のある・好意的な露出を果たすことができた。今後はアンダーカテゴリーを含む日本代表選手やウインターカップ出場チームの地元、あるいは天皇杯・皇后杯開催地などのローカルメディアを含め、より広い範囲でのリレーションの構築・深化に努めていきたい。

以上